

池上秀畝 生誕150年

類い稀なる技巧と
追い求めた絵画世界 ⑥

池上秀畝は花鳥画を得意とした画家ですが、その一つの到達点ともいえる作品がオーストラリア大使館に所蔵されています。どうして大使館に？と不思議に思われるかもしれませんが、港区三田にある同大使館の地には旧大名家、蜂須賀侯爵家の屋



「桃に青鸞・松に白鷹図」

昭和3年（1928）

板絵着色・表裏2面 オーストラリア大使館蔵

物語を秘めた秀畝畢生の大作



敷がありました。昭和2年に竣工した洋館に、今回の展覧会の目玉でもある杉戸絵「桃に青鸞・松に白鷹図」がはまっています。杉戸絵とは絵の描かれた杉板の扉のことで、京都の古刹などで廊下を仕切る様子がお馴染みかもしれません。昭和63年の取り壊し直前の写真が残っているのですが、これがどうにも

洋館にはしっくりこない。実は同じ年に和館も竣工していたようで、当初はそこに設置されていたかと考えられますが情報が乏しいのが現状です。とにかく、この杉戸絵は蜂須賀侯爵邸のために描かれたものであることは間違いないと断言します。

「桃に孔雀」と紹介されてきました。が、今回の調査でこれどう見ても孔雀じゃない。と、調べてみたら東南アジアに生息する青鸞であることがわかりました。しかし、なぜこんな珍鳥をわざわざ選んで描いたのでしょうか。これには施主の子息、蜂須賀正氏が関係しているようです。正氏は絶滅した幻の鳥「ドードー」の研究で知られた鳥類学者で、ケンブリッジ大学の卒業論文として「鳳凰とは何か」を提出し、伝説上の鳥、鳳凰のモデルはその姿や鳴き声から青鸞であると結論付けているのです。つまり、この杉戸絵には発注者の意図が反映されており、それと同時に、制作者の秀畝には正確さと緻密さが求められたようです。上野動物園や博物館の剥製を何度も写生したスケッチブックが残っており、その苦心の跡が伺えます。そんな物語を秘めた秀畝畢生の大作をどうぞご覧にいらしてください。

（文責：練馬区立美術館 加藤陽介）